

【特別寄稿】

## 仮想現実の世界に生きる

柴田 有

二〇世紀は自然と文化に代えて、システムや制度を尊重する時代であった。二〇世紀という時代を特徴づけるとすれば、私はそう言いたい。二一世紀になって、人類はその結果を味わっている。人間は己の力量を超えた難問を、知らず知らずに、自らに課してきたのではないか。われわれは長い眠りから覚めて、今、二二世紀への旅立ちを支度しなければならない。

三月一日に福島原子力発電所で発生した事故は、現代文明のこれまでの歩みを、深刻に考え直す機会となった。誰も気付かぬうちに、災害は急速かつ広範囲におよび、その真の影響は何十年も経ってからでなければ分からない、と言う。多数の人間が、知らぬ間に放射線の攻撃にさらされる。そこが恐ろしいのである。しかも、それだけではない。海や農地はどうなるのであろうか。遠く離れた町の商店はどうか。

この種の文明の病はいかにも現代的である。地球温暖化現象、化学物質の汚染、遺伝子組み換え食品、電磁波障害など、様々な分野で病勢が潜伏している。どの場合にも、気が付いたときには遅すぎるといふことになりそうである。先日、電車での帰路の途中にこういうことがあった。一人置いて座っていた中年の客が何を勘違いしたのか、私を、テレビで原発事故について解説していた人間だと思い込んだようなのである。彼が私に向かって語りかけようとしたことは、大略、次のようであった——「失敗は必ず進歩に役立つのだから、あんたもテレビで言っていたように、ここを何とか凌いで危機を乗り越えようじゃないかね。」吹き出しそうになりながらも、その場では、ただ拝聴するしかなかった。けれども、私はこの人の言うことに全部賛成する気にはなれない。現代文明の下では、これまでの進歩史観が通用しなくなっている。失敗してからでは遅い、という現象も起こってくるからである。

だいたい以前から「システム」という言葉が気にかかるようになった。システムという語がむやみに氾濫してきたような気がするのである。「仕組み」とか「機構」とかの日本語で十分表現できることを、わざわざシステムと言っているような、余計な感じがしたのかも知れぬ。しかし、それだけではないな、という気もしていた。折々に、何か変だということを感じていたのであろう。システムの語は元々ギリシャ語で、システマ (*systema*) と言った。そして、生命の息吹を吹き込まれた生き物を指し、様々な部分から構成されたものという意味である。例えば、プラトンは世界という巨大な生き物を指して、この語を用いている。その世界は靈魂と身体とを具えた生き物であった。つまり、世界という生き物は、

身体の一部に棘が刺さっただけでも全身で同じ痛みを感知できるような、そういうシステムであった。これに対し、流行語の「システム」はたいいてい、魂の入っていない、生命を欠いたものである。そういう気の抜けたような語感を、どこかで聞き取っていたように思う。

今日の工学で用いられる「システム」という語は、一口で言えば概念の連関ではないかと思う。(そう言い切る事のためらいを感じるとすれば、それでもかまわないでしょう。) 原子炉内で起こっている核分裂とその制御、核分裂により生じる熱量とその冷却、蒸気への変換と熱交換など、一連の系統は概念の連関として組み立てられる。さらには、図示されてシステム図が生まれる。そして概念は多かれ少なかれ静態的、常態的であるから、システム全体は恒常かつ正常な動作を続けるはずだ、ということになる。まるで永久機関のような錯覚を与えるのである。ここに概念の魔力が潜んでいる。概念を指示する語が外来語、特に英語であるならば、なおさらであろう。概念化は思考の手段ではあるが、しばしば、対象を捉えきついているという錯覚を伴う。また概念から構成されるシステムの図は、本来、事故や故障を書き込むことに向いていない。インターネットでウィキペディア (Wikipedia) を調べてもらったら、原子炉とは、「安全かつ継続的に原子核反応を持続させるための装置」という説明だった(二〇一一・五・二六版)。

だが、原子力発電産業は当初から事故に直面してきた。スリーマイル島やチェルノブイリで発生した事故は、現代人の記憶にもいまだ新しい。しかし、そのつど事故原因の究明がなされ、対策を講じるこ

とにより、最近は著しく発生確率が下がった、と言われる。いったい、原子炉において大事故が発生する可能性はどの程度なのか。この問題に対し、危険度を見積もる手法として、「リスク解析」なるものがある。事故の発生するシナリオを前もって想定し、それが実現する確率を求め、といったやり方である。想定される事故の種類を詳しく分類し、一覧表にする。今回のように、炉心を冷却する能力の低下ないし喪失といった事態は、もちろん大項目で挙がっている。その大項目の中に、冷却能力の低下を引き起こす、さらに具体的な場合が下位項目として挙がっている。解析結果の報告書は公表されており、有名なものにラスムッセン報告が知られる。そういうところから出てくる結論は、ほとんどの場合、原子力発電がいかに安全であるかを印象づけるものである。だが、その種のリスク解析に対して、いささか疑問を感じずにはいられない。というのも、その種の分析は、結局概念の連関の中でなされた試算ではないか、と考えるからである。

事故が発生してからかなり時間が経った後でも、専門家たちは多かれ少なかれ楽観的な見通しの発言をした。その楽観主義に、国民は少なからず当惑したわけである。「一般の方は、心配なされなくてよらしい」「専門家に任せておきなさい」と言う政府関係者、学者、保安員たちの楽観姿勢には、いくつかのやむを得ざる動機があつたであろう。それは分かる。よく分かるのだが、それでも一点だけは指摘しておきたい。彼らは概念世界を通じて、そのフィルターを通じて異常事態に接していたのではないか。そういう感受性のありようが、そういう触覚が少々気になったのである。震災の当日、現地に滞在してい

た東電社員らは、激しい揺れの中でも発電所の事故が発生するとはまるで思わなかった、と述べている。原発の安全神話は、この感覚のズレに根ざしているのであろう。

日本人は海の神を龍の姿に描いてきた。龍神とか龍宮という昔からの言い方に、そのイメージが伝わっている。漁師たちはそういう海神様を知っており、今日も祭りを執り行う。私は臆病だからこんな想像をすることがある。龍は突発的に、不意に凶暴な性格を示すのではないか……。巨大な力で海の世界を統治し、美しい凧の日を恵んでくれる。しかしまた、荒れ狂って、恐ろしい形相を見せる。そういう気まぐれな龍神様と付き合う術は、漁師たちが一番よく知っている。「今日はナギだ」「今日はシケだ」と言いながら、海神様の悪口だけは口が裂けても言わない。

いささか唐突の感を抱かれるであろうが、ここで漁師の労働に目を向けてみたい。自然の力を身体で受け止めながら、自然条件の変化に即応しながら、狙った漁をする。海の上で漁をする、もうひとつの技術に注意してみよう。これまで考えてきた、原子力発電の技術と比較してみるのである。

広い海に出れば、想定外の現象が生じることは自然の本性である。漁師はそのことを知っており、それが彼らの世界観であろう。潮の変化を予測する理論はない。気象の変化についても同じであろう。数式や図式には収めきれない要因が働くからである。漁に用いる網や縄の絶望的な絡みを解くノウハウなど存在しない。魚の行動も決まっていけない。昨日居た場所に、今日も居るとは限らない。こういう海の仕事に都会人の考え方はなかなかついていけない。そこで生産計画というような考えを持ち込もうと

する。都会では、概念や書類や会議が判断の手續きとされるからである。では、漁業がどのような営みなのか、もう少し見てみよう。

漁師たちは日々観察の努力を怠らない。時々刻々、潮の変化と付き合う姿勢がなければ、できない仕事なのである。「潮が読める」かどうか、「魚の気持が分かる」かどうかに労働の成果がかかっている。その日その日の生きた観察と体験をもとに、予想を立てるだけである。海の上で日々起こってくる予想外の事態に対しては、身体的な判断力によって対処するのである。だから、こう言うことができる――、漁師は自然を概念で捉えない。絶えず流れ、その向きも、色も、水温も変化する潮と付き合いながら、何とかやっていく。身体感覚と、経験とカンを活かしてすばやい判断を下す。今日ダメでも潮が変われば、一晩で何トンというカマスが網に入るのだ。それが彼らの現場である。地デジのテレビには、目がさめるほど美しい魚群の映像が映っているかも知れぬ。しかし、どんなに色鮮やかであっても、それは概念に還元される魚であろう。

実を言えば、漁師も概念を用いる。話を裏切るように恐縮だが、漁師も概念を使って考えるのである。漁師言葉で「二枚潮（にまいじお）」と言うことがある。これは潮の流れが上層と下層で逆になっており、そのために網を下ろす作業が難しくなる状態を言う。二枚潮に気付かぬままやってしまうと、思いがけない方向に網が流されてしまい、漁にならない。この例だけではない。他にも様々な概念が用意されているのである。けれども漁師は現場の潮況と付き合いながら、絶えず概念を調整している。自らの観

察に照らして用いるから、概念の輪郭は柔軟に動き、場合によっては溶解してしまふ。現場の体験と連係しない概念は存在しない。

アナゴ漁の漁船に乗った時の話である。まだ四〇代の、腕のよい漁師の仕事振りを目の当たりにして、時間の経過を忘れるような経験であった。操船、漁具の取り扱い、魚探やローラー類の機材の操作、取り込み、魚の仕分けが一連の動作に組み立てられ、細かくみれば何百何千という手順が一回りのサイクルになって流れる。しかもその間、海況の変化や他船の動向に注意を怠りはしないのだ。それをすべて一人で、黙々とやっつてのける技術は、これこそシステムの名に値するものではないのか。システムの節目ひとつひとつは確かに概念化しうる。しかしまた、個々の身体動作は現場の状況に即応している。概念は補助手段の役割を果たすにとどまる。つまりそこでは、現場感覚と概念と知性とが一体となって生産活動が成立している。そういう一体性と類比的に、漁師の作業もシステムを成している。これに照らして考えてみたいのである。原子力発電のシステムはどのようなものかを。

原子力発電のシステムは概念の連関ではないか、と先に言った。では、そのシステムに現場はあるのだろうか。大小の異常や想定外が日常的に付随する現場である。電力を利用する我々の立場で考えれば、それは意識したくない問題かも知れない。システム図の上で「安全かつ継続的に」電力が生産されるものと思っていきたい。だが、原子炉といえども、原子核反応を制御するための、物体の組み合わせで出来た装置である。燃料棒や制御棒、軽水、コンクリート壁、無数のパイプ群、電気回路の配線などはすべ

て物質なのである。とすれば、劣化や老廃物が生じることが避けられない。パイプひとつをとつてもそこに付着する水アカ、錆び、継ぎ目を留めるボルトの緩みという具合に、数えればキリがないだろう。海の仕事と同じように、予測し得ぬ自然現象も生起するのではないか。人間の身体のように、好不調の日があつてもおかしくないのである。原子力発電所にもさうとう注意深い現場の作業が必要なことは推して知られる。定期的に実施される、入念な保守点検作業はそのひとつであろう。その仕事にあたる作業員たちは、もちろん下請けの労働者である。そして、五次請けとも六次請けとも呼ばれる人々である。そのレベルで起こってくる現象は、正常異常を問わず、どのくらいシステム全体と連携しているのだろうか。概念レベルの思考と現場とが、生きた結節でシステムを成しているかどうか、いささか不安である。少なくとも、一般人にはほとんど見えてこない側面である。

知性的に組み立てられたシステムと現場との疎通は、事故発生後ますます悪くなったように見受ける。大震災の数日後、無人飛行機を使って上空から撮影した写真を見ると、四基の原発は白煙をあげており、残骸のような姿を曝け出していた。衝撃的な光景である。別の写真には、原子炉の建屋に向かって放水する人々の姿も映っている。その人々は消防隊員、自衛隊員、現場作業員たちであると、後で聞いた。危険な反応の進行を食い止めようとして、必死の努力をしているのである。写真に写された現場の情景は、原子力発電の高度な制御システムとあまりにもかけ離れている。最先端の技術は、事故や故障に対しては無力ではないかとさえ思えた。原子炉の正常な運転が続く限りでは、という前提の下で設計されている。



しかし、一旦正常運転の軌道から脱線すれば、元に戻すことが容易ではなくなる。原子炉の内部がどう  
いう状態に陥っているかさえ、誰も把握できぬまま長時間放置されたようである。

概念システムと現場との結節不良、それを感知したのは私ひとりだけであろうか。そうではあるまい。  
その不協和音は様々な形であちこちに反響している。専門家集団の発言と対照的な現場作業員の姿、そ  
こに違和感を覚えなかった人はいないだろう。その亀裂はどこから生じたのか。どうすれば血の通った  
結節を創造できるのか。いやしくも知識を考察するものとして、知識人はこの課題を引き受けないわけ  
にはいかないだろう。我々に巨大地震の発生をとどめる力はない。あらゆる災害に対して安心安全な生  
活を保障することはできない。けれども概念によって呪縛されたシステムから一歩でも脱出することが  
できるなら、それが次世紀へのひとつの準備になるのではなからうか。

（福島原発の事故を経て、二〇一一年六月）